

モンゴルで揺らぐ「お互いさま」精神

市場経済に基づくグローバル化により、社会や経済を発展させようとする動きは世界の主な流れになっています。その結果、人びとが脈々と築き、受け継がれてきた風土に合わせた暮らしが失われつつあります。それが環境の悪化をもたらし、地域の資源を使いながら暮らしてきた社会的な弱者に、より強い悪影響をもたらします。近代化と伝統的な暮らしがせめぎ合い、受け継がれてきた考え方が揺らぐモンゴル国ドンドゴビ県サインツァガーン郡の牧畜民の暮らしを、出会った人びとの言葉を交えて紹介します。

風土に適した遊牧

サインツァガーン郡は、首都・ウランバートルから南に約300km、寒く、乾燥した地域です（年間平均降水量13mm、年間平均気温2.3℃）。この地域の特徴は降水量が少なく、変動が激しいことにあります。厳しい自然の中で、人びとの暮らしを持続可能にしてきたのが遊牧です。

遊牧とは牧畜を主な生業とする人びとがヤギ、ヒツジなどの家畜とともにエサとなる植物や水を求めて移動することです。移動式住居「ゲル」はすぐにたためるため、移動の準備は数時間で

終わります。荷物をトラックに乗せて、次の放牧地を目指します。ふだんは数km～数十kmの決まった範囲を季節ごとに移動します。干ばつなどの災害が起これば、いつもと違う放牧地に移動します。それは数百kmに及ぶこともあります。

移動を支えてきた「お互いさま」精神

このような移動を可能にしているのが「お互いさま」という考え方です。降水量の変動が激しい地域では、いつ自らも移動しなければならない立場になるかわからないので、自分が使っている放牧地だからといってほかの地域から来た人を追い出すことはありません。

この地域で1988年から放牧をしているバザルワーニさん（50歳）は、遠くから移動してきた人たちについて、「困って移動してきた人たちを追い出すことはできない。その人たちも私たちがいることを知れば、冬から春のために大事にしている放牧地は使わないし、1カ所に長く居続けることもない」と答えます。近隣の牧畜民の間でも「お互いの放牧地が悪くなったら、それぞれがいつも使っている放牧地を使う。でも草がなくなるまでは使わないよう注意する。お互いに困らせないようにしているので、いつでも助け合える関係がある」と言います。自分が使っている土地を自分だけのものと思わず、困っている



写真① 移動式住居ゲル

112



写真② バザルワーニさんと生まれたヤギ

人と分かち合いながら資源を利用しています。

さらに、災害により多くの家畜を失い、生活が成り立たなくなった世帯もあります。その世帯には、家畜を有する世帯が雌の出産の世話を任せ、生まれた子をあげることがあります。家畜は牧畜民にとって大切な資産です。それをも分かち合い、災害から立ち直す手助けを牧畜民同士でしています。

モンゴルの風土にあった持続可能な暮らしは、この「お互いさま」精神に支えられてきました。

市場経済化で変わりゆく社会

モンゴルは1992年に新憲法を制定し、計画経済から市場経済へと移行しました。それでも新憲法には、家畜は国民の富であり、国が保護すること、国土の70%以上を占める放牧地の私有を認めず、国民が共同で使うことが書かれています。放牧地以外は基本的には私有を認めていることを考えると、風土に合わせて営まれてきた、お互いさまの遊牧を守り続けようとする意思を感じます。

しかし、経済体制の移行後、アジア開発銀行は、モンゴルの放牧地が共有地のままでは、人びとが利益を追求して過剰に使われ、劣化するのではないか、自分の土地ではないので投資されにくく近代化の妨げにもなるのではないかと

考えました。そのため放牧地を私有化し、放牧地の過剰な利用を防ぎ、近代化を促そうとしました。

アフリカや中国では、移動していた牧畜民に特定の土地を配分し、定住化させた地域もあります。しかし、かえって土地が過剰に使われ、生活も貧しくなったと言います。モンゴル政府は自らの風土にあった遊牧を続けるために、新憲法の定めを守り、海外からの圧力に抵抗しました。

それならば、と国連開発計画は牧畜民をグループに分け、放牧地の占有権を与える立法を目指すよう提案しています。しかし、降水量が少なく、変動の激しいモンゴル南部地域の反対でいまだに実現していません。

また、牧畜民のグループが特定の範囲の放牧地を管理する取り組みを世界銀行が支援しています。降水量の安定した北側のハンガイ地域では、牧畜民のグループが、この放牧地は夏に使う、ここは冬に使うと区分けをして計画的に利用するところも多くなりました。一定の範囲の放牧地を計画的に利用しようとする牧畜民にとっては、ほかの地域から入ってきて、その時々状況に合わせて放牧地を使う遊牧民は邪魔な存在です。サインツァガーン郡の牧畜民からは、北側に移動すると追い出されたり、お金を取られたりすることが多くなったという声が聞かれるようになりました。

移動性と近代化のせめぎ合い

サインツァガーン郡には、マンダルゴビという県庁所在地があり、県内最大の市場があります。そこで畜産物を売りたいという牧畜民が集中し、保有する家畜の頭数が多くなりました。

降水量が少なく、植物が少ない年もマンダルゴビ周辺に多くの牧畜民が居続け、植物を食べ続けるようになりました。そして、土の表面を覆う植物がさらに少なくなり、前述のバザルワーニさんの畜舎にも砂が大量に移動してくるようになり

ました。大事な収入源であったヤギの毛であるカシミヤに砂が混じるようになり、仲買人の買取価格が下がり始めました。彼はカシミヤからミルクの販売に重点を移そうと考え、搾乳量の多い在来のヤギを導入し、マンダルゴビで商店を開いてミルクや乳製品の販売を始めました。

また、自分が冬や春に頼りにしている放牧地を、郡外から移動してきた牧畜民が夏や秋に使ってしまうことも増えてきたため、やむを得ず、畜舎近くのどうしても必要な20ha程度の放牧地を柵で囲みました。バザルワーニさん自身は、



写真③搾乳量の多いヤギを他県まで探しに出かけ、ミルクの量を確認するバザルワーニさん（左）

これまでどおりの遊牧を続けたいそうですが、「お互いさま」精神だけでは生活を維持することが難しくなり、いろいろな取り組みをせざるを得ないと言います。

それでも、サインツァガーン郡長は「苦しいときはお互いさまなので、移動してきた人を追い出したり、お金をとったりするべきではない」と言います。同郡は放牧地への柵の設置面積も最低限に制限し、他郡の牧畜民も含めて、みんなで放牧地を使うという政策を取り続けています。

この地域では今でも「お互いさま」精神が、持続可能な社会を支えています。一方、近代化の波も押し寄せています。ただし、移動性を低下させるような近代化は、持続可能性を低下させます。土地の私有や占有をベースとせず、加工や販売などの市場への畜産物の流通を促進させるような近代化と、伝統的な牧民の移動性を融合させることにより、この地域の新しい持続可能な社会づくりが模索されています。

マンダルゴビで牧畜民の様子を見てみると、市場の情報をこまめに収集し、今は肉の値段が高いから家畜を売ろうとするのではなく、その年に食べる分だけ、子どもや孫の学費など必要に迫られた分だけ、やむを得ず家畜を処分しています。彼らにとって遊牧とはお金を得るための仕事というよりも、人間と家畜の共存共栄を

願う文化そのものに見えます。効率的に利益を追求する方法や技術を導入して、モンゴルが守ろうとしてきた文化の基盤を揺るがしていないか、外部者として地域の風土を深く感じること、知ることができているのだろうか、と自らを省みています。

中村 洋



写真④搾乳量の多いヤギを増やすための種付け用ヤギと
バザルワーニさん